

## 日中における学校道德教育の現状に関する一考察<sup>†</sup>

渡邊 弘\*・周 珊珊\*\*  
宇都宮大学\*  
宇都宮大学\*\*

### 概要

本論の目的は、日本と中国の学校における道德教育及び道德の授業の現状について、日中両国の大学生を対象としたアンケート調査に基づき、その主な特徴と課題を検討することにある。

キーワード：道德教育、道德の時間、実施時数、連携体制

### 1. はじめに

日本の小中学校における道德教育は、1975年代の臨教審における德育重視、1988年の学習指導要領の「総則」に明記され「学校の教育活動全体を通じて行うものである」とし、さらに「家庭や地域社会との連携を図り」、「道德的価値の自覚を深める」ことが強調された。21世紀に入り、道德の教科問題が浮上した。そして、2008年に改正された学習指導要領において「道德の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行い」、「学校、家庭、その他社会における具体的な生活に生かし」て、豊かな心を養うために、一層学校・家庭・地域との連携が、新教育基本法第13条により強調された。こうした一連の流れから明らかなように、学校内外における道德教育は重視の一途を辿っていると考えられる。

一方、中国では、道德科目が文化大革命後に再開されて以来、中国の道德教育は35年間の道を歩んできた。1980年代に入り、中国政府は学校における道德教育の内容を数回にわたって拡充してきた。さらに1990年代には、「素質教育」\*という教育改革を行い、日常生活を基にした学生の実践能力を向上させることを目的とした新たな道德科目が実施された。なおこの間、家庭と地域社会における道德教育も重視するようになった。

\*「素質教育」…「資質教育」と翻訳される。受験偏重教育を克服し、知徳体の全面にわたって子どもの素質を伸ばそうとする教育

だが、こうした道德教育重視の傾向の一方で、両国の学校における道德教育及び道德の授業の実態はどのような状況にあるのだろうか。本論では、この問題を少しでも明らかにしたいという考えから、実際に学校で道德教育を経験した日中両国の大学生を対象にアンケート調査を実施し、その主な特徴と課題を実証的に考察する。

### 2. 日本における学校道德教育の実施状況

まず、日本の学校で実際に行われる道德教育、特に道德の時間の授業についての状況について考察したい。

#### (1) 学校の道德教育についての印象

まず、状況を分析するために、宇都宮大学に在学している大学生を対象とし、それぞれが小中学校時代に受けてきた道德の授業に関するアンケート調査を平成24年4月と10月の2回にわたり行った。実際に配布したアンケート調査用紙は102枚で、回収し有効である回答は101枚であった。

まず、学生が受けてきた教育に基づいて、学校における道德教育と道德の授業が十分に機能しているかどうかについて質問した。その結果は図2-1と図2-2のように示している。

<sup>†</sup> Hiroshi WATANABE\*, Sansan SYU\*\* : A Thought on the Situation of School Moral Education in Japan and China.

\* Faculty of Education, Utsunomiya University

\*\* Faculty of Education, Utsunomiya University

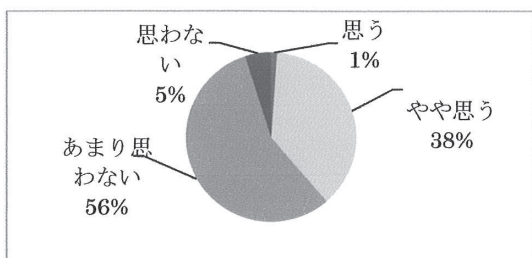


図 2-1 現在の学校での道徳教育は十分機能していると思いますか

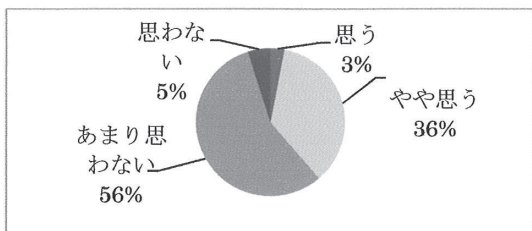


図 2-2 現在の学校での道徳の時間は十分機能していると思いますか

以上のデータにより、「現在の学校での道徳教育は十分機能していると思いますか」の設問(図 2-1)において、「あまり思わない」と回答した割合が最も高い、56%である。次に高いのは、「やや思う」の 38%である。また、5%の学生が「思わない」と答えている。「思う」という回答を選んだのは僅か 1%である。

「現在の学校での道徳の時間は十分機能していると思いますか」(図 2-2)では、図 2-1 と同じように、「あまり思わない」と答えている学生が最も多く、その割合は 56%である。「やや思う」を選んだ学生が図 2-1 より少ない 36%になっている。また、「思う」と回答した学生が図 2-1 より 2%多くなり、3%になっている。「思わない」と答えている学生の割合が 5%である。

図 2-1 と図 2-2 のデータにより、現在、宇都宮大学に在学している学生は「現在の学校における道徳教育」について機能していないと思っている割合が大きいことが分かる。また、道徳の授業の印象とその内容について記述式でアンケートをとったところ、多くの学生がそれに対してマイナスな印象を持っていることも明らかとなった。次はその回答の一部である。

#### 【道徳の授業の印象とその内容について】

(平成 24 年 4 月 12 日アンケートより抜粋)

- ① 中学校の道徳は、ほとんど印象に残っていません。授

業自体がなかったような気がします。

- ② 中学校では道徳の授業を行った記憶がないですが、小学校の頃を思い出してみると「心」について考えたり「心」と向き合うといったことに少し恥ずかしさを感じた覚えがあります。
- ③ 小学校の時は、物語の人々の気持ちについて自由に考えるので「国語の仲間」のような感覚だった。
- ④ 音読をしてその後先生が生徒に「ここはどう思いますか」と聞いて生徒が答えるというものだった。中学校の頃は道徳の授業はなかったと思う。
- ⑤ 道徳の授業をやっていたことは覚えています。内容はあまり深く覚えていません。進路の話とかに使われていたような。
- ⑥ 小中学校の道徳はあまり記憶に残っていませんが、短い話を読み、そこから感じたこと考えたことを発表しあったように思います。道徳に関してはこれくらいしか印象がありません。
- ⑦ 小中学校の道徳授業の印象は副読本を中心に授業を進めていったが、内容までは覚えていない。たまたま、ディベートなどはやっていた。それ以外は授業の振替などして道徳の授業をやっていなかったりした。

上記の中で特に印象的な点は、道徳の授業の印象については、「覚えていない」「ない気がする」と答えている学生が多いということである。また、その内容に関しては、読み物資料を読みながら進められ、読んだ感想を発表し、クラスメイトと話し合うといったことがほとんどであった。そのほか、道徳の授業が他の教科等に振り替えられる点も多数見られた。

もちろんアンケートの中には、道徳の授業が楽しかったとか、印象が深い内容があったなどと記述した学生もいる。だが、上記に掲載したような意見と比較したとき、こうしたプラスの意見はごく少数であった。以上のことから、実態として学校での道徳教育は総体的に機能しているとはいえないといえよう。

#### (2) 道徳の時間の実施時数について

日本における道徳教育の全国的な推進状況については、文部科学省が全国すべての国公私立の小学校及び中学校を対象として「道徳教育推進状況調査」を行っている。ここでは、2003 年度(平成 15 年度)と 2008 年度(平成 20 年度)に実施された調査のデータを利用し、学校の教育現場で実際に実施された

道徳の授業の時間数を分析したいと思う。

まず、道徳の時間の実施時数については、2003年度（平成15年度）に行われた道徳教育推進状況調査のデータにより、図2-3と図2-4のとおりである。

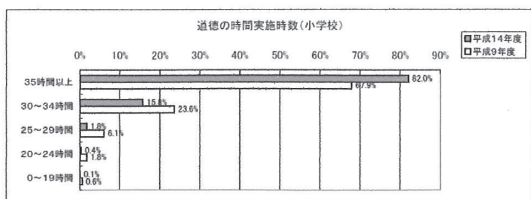


図2-3 資料 平成15年度道徳教育推進状況調査 道徳の時間実施時数（小学校）<sup>1</sup>

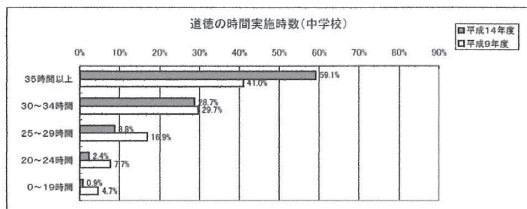


図2-4 資料 平成15年度道徳教育推進状況調査 道徳の時間実施時数（中学校）<sup>2</sup>

また、2008年度（平成20年度）の調査データについては図2-5のとおりである。

	平均
小学校	36.2単位時間 (35.3)
中学校	35.0単位時間 (33.6)

(平成19年度実績、括弧内は平成14年度実績)

図2-5 資料 平成20年度道徳教育推進状況調査 道徳の時間の授業時数

資料 平成20年度道徳教育推進状況調査 道徳の時間の授業時数<sup>3</sup>

まず図2-3では、平成14年度（2002年）に、日本の小中学校に行われた道徳の時間の実施時数は、前回の平成9年度（1997年）に比較して、35時間以上の割合が67.9%から82.0%に高まっている。同様に、中学校でも41.0%から59.1%に上がっている。

一方、35時間以下の割合は低下する傾向が見られる。当時、国の基準で定める「道徳の時間」の年間標準授業時数は、小学校と中学校とともに35単位時間であり、それ以上実施しているということになる。

また、平成19年度（2007年）の実績により、小学校が36.1単位時間で標準授業時数を上回っており、中学校が標準と同じ時数となっていることが分かる。前回の調査と比較すると、小学校では0.8単位時間、中学校では1.4単位時間増加していること

も分かる。<sup>4</sup>これらの調査データから見ると、小中学校における道徳の授業は以前より重視され、実施しているということになる。

### （3）道徳の時間の実施状況に対する教師の受け止め方

これまで学生の視点と文部省の調査により、日本における学校道徳教育の現状を分析した。ではここでは、教師の視点から分析してみたい。

2012年2月に東京学芸大学「総合的道徳教育プログラム」推進本部が「道徳教育に関する小・中学校の教員を対象とした調査—道徳の時間への取り組みを中心として—（結果報告書）」を発表した。これは小中学校で実際に勤務している教師を対象とし、道徳教育とその要となる道徳の時間での取組の状況や教師の意識などについて明らかにすることを主な目的として実施されたものである。ここでは、その調査を利用し、図2-6と図2-7のようにまとめ、道徳の時間の実施状況に対する教師の受け止め方について分析していく。

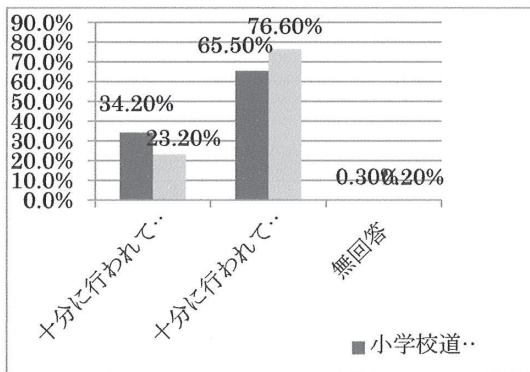


図2-6 道徳の時間の実施状況に対する受け止め<sup>5</sup>

上記の図2-6に示しているように、学校での道徳の時間の実施状況について、十分に行われていると思うかどうかという設問に対し、「十分に行われていると思う」をあげた一般小学校の道徳担当教師の割合が34.2%であり、中学校の場合は23.2%である。一方、「十分に行われていないと思う」と回答した一般小学校の道徳担当教師の割合が65.5%であり、中学校の場合は76.6%である。以上の結果から、否定的な回答が圧倒的に多いことが分かるだろう。



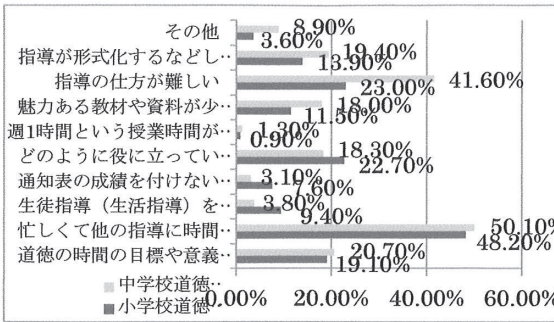


図 2-7 十分には行われていないと考える理由

さらに同調査で、「十分に行われていないと思う」を選んだ教師を対象に、その理由について質問した結果が図 2-7 である。このデータによれば、小学校の場合は、「忙しくて他の指導に時間を取られがちである」を挙げた者の割合が 48.2% と最も高く、以下、「指導の仕方が難しい」(23.0%)、「どのように役に立っているのかつかみにくい」(22.7%)、「道徳の時間の目標や意義が十分に理解されていない」(19.1%)、「指導が形式化するなどして魅力が少ない」(13.9%) などの順となっている。また、中学校の場合は、「忙しくて他の指導に時間を取られがちである」を挙げた者の割合が 50.1% と最も高く、以下、「指導の仕方が難しい」(41.6%)、「道徳の時間の目標や意義が十分に理解されていない」(20.7%)、「指導が形式化するなどして魅力が少ない」(19.4%)、「魅力ある教材や資料が少ない」(18.0%) などの順となっている。

以上のデータから見ると、十分に行われていない理由について多くの項目で割合の高さの変化は、小学校と中学校に同じような傾向があるといえる。また、生徒の発達段階により、その理由の順番が少々違うところもある。その中で、両方とも、「忙しくて他の指導に時間を取られがちである」の割合が最も高くなっている。これは、教員が授業以外の業務に時間が多くとられていることや各教科に重点がおかれてなかなか領域としての道徳授業の準備まで手が回らないということが考えられる。次は「指導の仕方が難しい」と「道徳の時間の目標や意義が十分に理解されていない」が高い。これらの傾向から、現在、小中学校で道徳教育を担当している教師自身の道徳教育に関する認識と専門性が不足していることが分かる。今後は、単なる形式的な研修だけではなく、さまざまな場での実質的な基礎から応用、実践にいたるまでの道徳教育を学ぶ場を積極的に設け

ていく必要があるといえる。

### 3. 中国における学校の道徳教育の実施状況

#### (1) 学校の道徳についての印象

筆者は宇都宮大学に在学している中国留学生を対象とし、自分が小中学校時代に受けてきた道徳の授業についてアンケート調査を行った。実際に配布したアンケート調査用紙は 50 枚であった。そのうち、回収され、有効である回答は 48 枚であった。

まず、日本の学生と同様に、学生が受けてきた教育に基づいて、学校における道徳教育と道徳の授業が十分に機能しているかどうかについて質問した。その結果は、図 2-8 と図 2-9 の通りである。

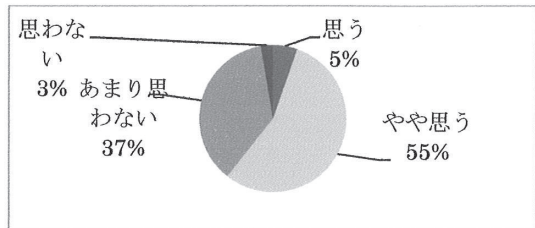


図 2-8 現在の学校での道徳教育は十分機能していると思いますか

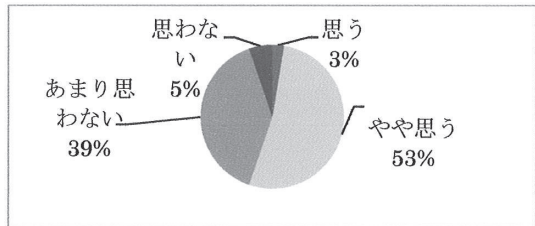


図 2-9 現在の学校での道徳の授業は十分機能していると思いますか。

以上のデータにより、「現在の学校での道徳教育は十分機能していると思いますか」の設問(図 2-8)において、「やや思う」と回答した割合が最も高く、55%であり、「あまり思わない」という回答が 37% で次に高い。また、3%の学生が「思わない」と答えている。「思う」という回答を選んだのは 5%である。

「現在の学校での道徳の授業は十分機能していると思いますか」の設問(図 2-9)では、図 2-6 と同様に、「やや思う」と答えている学生が最も多く、その割合が 53%である。「あまり思わない」を選んだ学生が図 2-8 より多い 39%になっている。また、「思わない」と回答した学生が図 2-8 より 2%多くなり、5%になっている。「思う」と答えている学生の割合が 3%である。

図 2-8 と図 2-9 のデータにより、現在、宇都宮大学に在学している中国人留学生は「現在の学校における道徳教育と道徳の授業」について肯定的な回答（思う、やや思う）の割合が半分以上であることが分かる。だが、「あまり思わない」と答えている者の割合が 3 割程度であることも無視できない。これらにより、内容上の問題は別として、ある程度、中国における学校道徳教育は総体的に機能しているといえる。

## （2）道徳の授業の実施状況

中国では、全国範囲で行われる調査がやりにくい。そのため、日本のような「道徳教育推進状況調査」がない。その代わりに、本論文では、中国の福建省に行われた「小中学校の思想道徳教育の実施状況についての調査と思考」を基にして分析していきたいと思う。

2009 年 5 月に福建省教育研究室により「小中学校の思想道徳教育の実施状況についての調査と考え」が出された。これは福建省の小中学校における道徳教育の現状を明らかにするため、省内にある学校の教師を対象として行われたサンプリング調査である。具体的な結果とその分析に関しては「道徳の授業の実施状況」と「道徳の授業の教育効果」の 2 つの視点から見てみよう。

まず、調査のデータにより、「道徳の授業の実施状況」について 75.3%の学校は週に 2～3 単位時間の道徳授業が行われている<sup>7</sup>。中国では、各地方の基準により定められた道徳授業の標準授業時数が異なるが、平均的に週 2～3 単位時間となっている。これらによれば、学校での道徳授業は標準授業時数の通りに行われていることが分かる。

また、「道徳の授業が十分に行われているか」について聞いたところ、「思う」と思う者の割合が 46.1%である。「やや思う」と回答した教師の割合は 53.9%である。その中で、「思う」を答えている教師は、その理由について、「道徳の授業が指導案通りに行われている」、「多様な指導方法があり、社会変化に適応でき、社会実践活動と結合できる」からと記している。さらに、学生が学んだ知識を身に付け、他人への配慮ができ、感謝という気持ちも持たれるようになってきているなどの理由もある。そして、「やや思う」と回答した教師は、道徳の授業に存在している問題点を次のように述べている。

- ① 道徳教育への重視が足りない。国語、英語、算数などの授業を優先する現状がある。道徳の授業の時、その 3 つの科目にとられることが多い。
- ② 道徳教育の専門知識を持つ教師が少ない。ほとんどの学校では、国語の担当教師かクラスの担任教師が道徳の授業をやっているという現実がある。専門性の不足により、授業の計画性が乏しくなり、指導案の準備が不十分である。
- ③ 教科書については、学生の実生活から離れて形式化しすぎ、知識や概念を網羅的に並べている。
- ④ 指導方法が画一になっている。基本的な指導方法は、教え込みとなっている。他の教科との関連も少ない。
- ⑤ 学生が参加できる生活体験と社会実践の機会が少ない。<sup>8</sup>

以上の内容から、中国における学校における道徳教育の実施状況の一端をうかがうことができるであろう。道徳の授業は「課程標準」（小学校は「全日制義務教育品德と生活課程標準」、「品德と社会課程標準」、中学校は「全日制義務教育思想品德課程標準」）に基づいて行われている。しかし、学歴重視という社会現状は依然として深刻化している中で、道徳の授業は道徳性の育成より知識の学習を重視しており、社会実践より授業中の学習を重視しているという現状を無視できない。このような教育現状の中で、道徳教育を充実するために、各学校の教育現場で生起している具体的な問題に適用できる対策をとることが必要である。

## 4. 日中における学校・家庭・地域の連携体制についての研究

### （1）アンケート調査に見る学校・家庭・地域の連携の必要性

はじめにも述べたように、現在、日中両国の学校において、道徳教育を重視する傾向が強まっている。だが、実際の教育現場では、様々な問題が起こっていることも事実である。これらを解決するために、学校側が、道徳教育の充実を目指す対策をとることが必要と考えられる。その一つの重要な方策が、家庭、地域社会との連携である。その理由として、第 1 は、道徳教育は学校だけの問題ではなく、同時に、

家庭、地域社会においての問題でもあるからである。特に今日、学校だけでは解決できないような諸問題が増加してきているということである。第2は、学校・家庭・地域社会が、子どもたちの道徳性を高めていくために目的を共有化し、さらにそれを実践化していく必要があるということである。

筆者は、宇都宮大学に在学している学生を対象にし、自分が小中学校時代に受けてきた道徳教育の経験に基づいて「道徳教育における学校・家庭・地域の連携に関するアンケート」調査を行った。ここでは、その調査の結果を分析し、道徳教育における学校・家庭・地域の連携の必要性を明らかにしたい。

## (2) 日本人学生を対象とした調査の分析

すでに前述したように、日本の学校での道徳教育について聞いたところ、「現在の学校での道徳教育は十分機能していない」、「現在の学校での道徳の時間は十分機能していない」と答えている学生の割合が56%に及ぶことが分かった。そして次に、このような現状の中、学校だけで解決できない道徳上の問題について、学校・家庭・地域の連携は必要であるかどうかを回答してもらった。その結果は次の図3-1のとおりである。

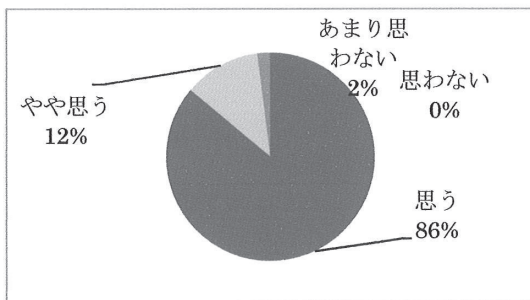


図3-1 現在、学校だけで解決できない問題（情報モラル教育、いじめ問題、食育など）がある中で、学校・家庭・地域の連携は必要だと思いますか。（日本）

以上のデータにより、「学校だけで解決できない問題（情報モラル教育、いじめ問題、食育など）がある中で、学校・家庭・地域の連携は必要だと思いますか」の設問（図3-1）において、「思う」と回答した割合が最も高く、86%である。次に高いのは、「やや思う」の12%である。この両者を合わせると98%にのぼり、ほぼ全員ということになる。また、2%の学生が「あまり思わない」と答えている。「思わ

ない」という回答を選んだ学生はいなかった。

これらのデータから、明らかに「思う」と「やや思う」という肯定的な回答が多いことが分かる。学生たちが自らの経験から、学校・家庭・地域の連携が必要と感じていると考えられる。

また、上記の設問に肯定的な回答、「思う」及び「やや思う」を選んだ学生に、「学校・家庭・地域が連携するために、今後どのようなことが必要だと思いますか」について意見を自由記述欄に書いてもらった。それらを整理するところ、「情報の共有化」、「話し合い」、「信頼関係」、「協力」などの言葉が多く使われていることが分かる。学生たちの関心と着眼点は、これらのキーワードにより多少分かれるものの、全体から判断すると相互理解と協力を図っていくことが重要であることが伺える。内容をまとめてみれば、次の通りである。

まず、子どもの道徳教育に、学校・家庭・地域全体が関わっているという意識を構築することが大切である。その意識の下で、相互の実態を把握するために、定期的に話し合う機会を設け、相互の情報を交流し、共有化する。また、三者のコミュニケーションができる前提として、相互に信頼関係を築くことの重要性が学生たちにより強調されている。

また、学生たちは学校・家庭・地域が連携するために、具体的例を挙げている。ここでは、その中の代表的な記述内容をいくつか列挙してみたい。

- ・学校は、どのような境遇（片親、共働きなど）の家庭も参加しやすい保護者会、子供会などの会議を開く。
- ・学校はもっと家庭、地域に向けて公開するために、ネットのホームページなどの情報交換の手段を使う。
- ・学校は休日に、地域社会の人々を対象としたセミナーを開催する。
- ・学校は道徳での研究授業、公開授業を実施し、その際に教師、保護者、地域の人々にも参観できるような取組をする。
- ・地域主体の校外授業、体験活動などを行う。

上記のような例から見れば、学生たちが考えている実践例はほとんど、学校を中心とした三者の連携であることが分かる。

今回の調査には、図3-1にも示しているように、「学校だけで解決できない問題（情報モラル教育、



いじめ問題、食育など)がある中で、学校・家庭・地域の連携は必要だと思いますか」の設問に対して否定的な答えを出した学生の割合は2%である。では、この学生たちに理由を聞いたところ、次のようなことが述べられている。

「いじめ問題などは進んで、他人が口をはさむべきことではない。当人が解決すべきだと考えている。学校内のことは学校内で、家庭内のことは家庭内で解決すべきで、問題を互いに持ち込むべきではない。子どものケアは当然すべきだが、強すぎる連携は別の問題を引き起こしそうである。」  
「いじめなどは生徒間で解決するものであって、親や地域の人が解決できるものではない。」

以上のように、学校・家庭・地域の連携体制への否定的な声があるが、調査のデータから見れば、肯定的な意見が圧倒的に多い。なお、これらの否定的な意見も無視できない。特に、上記の「強すぎる連携は別の問題を引き起こしそうである」という指摘は傾聴に値する。つまり、偏った価値観を三者で統制的な押し付けになった場合、その危険性があるということであり、この点は十分認識しておく必要があるだろう。

### (3) 中国人学生を対象とした調査の分析

まず、「学校だけで解決できない問題(情報モラル教育、いじめ問題、食育など)がある中で、学校・家庭・地域の連携は必要だと思いますか」についての調査結果は、図3-2のように示している。

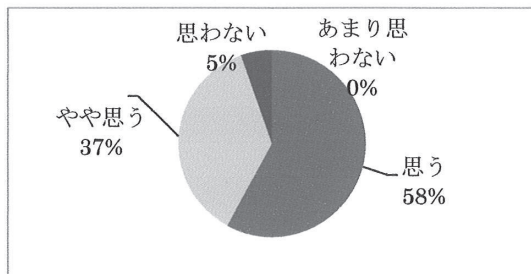


図3-2 現在、学校だけで解決できない問題(情報モラル教育、いじめ問題、食育など)がある中で、学校・家庭・地域の連携は必要だと思いますか。(中国)

以上のデータにより、「学校だけで解決できない問題(情報モラル教育、いじめ問題、食育など)が

ある中で、学校・家庭・地域の連携は必要だと思いますか」の設問(図3-2)において、「思う」と回答した割合が最も高く、58%である。次に高いのは、「やや思う」の37%である。また、5%の学生が「思わない」と答えている。「あまり思わない」という回答を選んだ学生はいなかった。

これらのデータを見れば、中国人留学生たちが日本人学生たちと同じ、「思う」と「やや思う」という肯定的な回答が多いことが分かる。また、はっきりと「思わない」を選んだ学生の割合は5%もある。以上のことにより、中国においても学校・家庭・地域との連携体制を構築することが必要であると考えられる。

また、上記の設問に肯定的な回答、「思う」及び「やや思う」を選んだ学生に、「学校・家庭・地域が連携するために、今後どのようなことが必要だと思いますか」について意見を自由記述欄に書いてもらった。それらの意見を整理してみれば、次の三つの傾向が見られる。

まず、日本人学生が出した意見と類似するものである。すなわち、学校・家庭・地域社会の情報共有の重要性が強調されている。また、道徳教育でつながる学校・家庭・地域のネットワークづくりが求められている。

次に、中国ならではの意見が多数記述されている。学校側からの視点によると、教師は定期的に家庭訪問をし、学生に校外活動への参加を勧める。また、道徳教育の内容については、学生の生活実態と対応できる教材を使い、法律に関する知識も導入などの意見も出された。地域側に対して、治安管理に力を入れ、子どもに安全な健康な成長環境をつくる必要があると学生が求めている。

そして、今回の調査で回収され、有効である48枚の回答の中で、43枚の答えには「家庭での教育を重視すべき」と書かれている。それは、子どもが生まれてから成長していく中で、最も子どもに影響があるのは家庭であると大多数の学生が思っているからである。そのため、保護者の道徳性を高めることが最も重要である。地域では、保護者を対象にする道徳教育の学校を開くべきと学生たちが提案している。ちなみに、これは現在日本でも注目されている「親学」に匹敵する提案に類似したものであるといえるかもしれない。

最後に、アンケートを受けた学生の中の5人は、

この設問に対して「分からない」と記入している。

以上のことから、宇都宮大学に留学している中国人学生たちは、道徳教育における学校・家庭・地域の連携が必要だと考えている。なお、三者の中心とみられるのは家庭であることも明らかにした。

また、今回の調査では、図3-2にも示しているように、「学校だけで解決できない問題（情報モラル教育、いじめ問題、食育など）がある中で、学校・家庭・地域の連携は必要だと思いますか」の設問に否定的な答えを出した学生の割合は5%である。これらの学生たちにその理由を聞いたところ、「学校は知識を教える場所である。学生の道徳教育については家庭のほうがその主な場所である。」とか、「学生の育つ環境や背景は人によってそれぞれ違うため、学校では道徳教育の役割を果たせない。各家庭で行うべきと思う」などの意見であった。

以上のように否定的な意見もあるが、全体的な傾向から見れば、道徳教育における学校・家庭・地域の連携が必要であることが分かる。

参照。

<sup>8</sup> 同上。参照。

#### 注

<sup>1</sup> 文部科学省「平成15年度 道徳教育推進状況調査」

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/c\\_hukyo3/siryu/07070908/007/001.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/c_hukyo3/siryu/07070908/007/001.pdf)

<sup>2</sup> 同上のwebページを参照。

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/c\\_hukyo3/siryu/07070908/007/001.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/c_hukyo3/siryu/07070908/007/001.pdf)

<sup>3</sup> 文部科学省「平成20年度 道徳教育推進状況調査結果」

[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2012/12/16/1282847\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2012/12/16/1282847_2.pdf)

<sup>4</sup> 同上のwebページを参照。

[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2012/12/16/1282847\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2012/12/16/1282847_2.pdf)

<sup>5</sup> 永田繁雄・藤澤文「道徳教育に関する小・中学校の教員を対象とした調査—道徳の時間への取り組みを中心として—〈結果報告書〉」東京学芸大学「総合的道徳教育プログラム」、2012年2月、58頁。

<sup>6</sup> 同上、58頁、76頁。

<sup>7</sup> 福建省教育研究室「小中学校の思想道徳教育の実施状況についての調査と思考」2009年5月31日。